

『この話をしてから八日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。29 祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。30 見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。31 二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。32 ペトロと仲間は、ひどく眠かったが、じっとこらえていると、栄光に輝くイエスと、そばに立っている二人の人が見えた。33 その二人がイエスから離れようとしたとき、ペトロがイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロは、自分でも何を言っているのか、分からなかったのである。34 ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。35 すると、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」と言う声が雲の中から聞こえた。36 その声がしたとき、そこにはイエスだけがおられた。弟子たちは沈黙を守り、見たことを当時だれにも話さなかった。』

【説教】

今日の聖書の言葉は、祈るためにイエスさまが山に登られるところが記されています。イエスさまは三人の弟子たち、ペトロとヨハネとヤコブを連れて、山に登って行かれました。聖書の中で、祈りを捧げる山といいますと、旧約聖書ではシナイ山とかホレブの山とかが思い浮かびます。そこは、ここでイエスさまと話をしているモーセとエリヤに、大変関連している聖なる山であります。この山での祈りの中で、モーセもエリヤも神さまに出会っております。後、思い浮かべるものとして、新約聖書の方で山と言えば、イエスさまが山上の説教をした時に登った山が思い浮かびます。つまり、この場合の祈る場所としての山というのは、そういった神さまがそのお姿を現すために、特にどれも神さまの言葉を授かる場所として考えられています。

このことを今の私たちがいえば、週ごとの礼拝で祈りを捧げるために、教会に集まってくることと重なっていると考えられると思います。讃美歌の言葉、祈りの言葉、信仰告白の言葉、聖餐式の言葉、そして説教の言葉を通して神さまは、そこに集う人々にご自分のお姿を現されるわけです。そのように考えますと、この山でペトロたち、弟子たちに起こったことは、私たちにも同じように礼拝において起こることだと言えるわけです。普段の日常生活の中で体験する様々な出来事を、礼拝の時に持ってきてそれらの言葉に照らして見ますと、ずいぶんと違って見えてくるということが起こったことはないでしょうか。私は一足先に説教の準備をするときに、黙想という祈りの中で聖書を読んで行くのですが、その時いろいろ新しい発見をすることがたくさんあります。以前と同じ所を読んでいるような聖書箇所でも、かなりガラッと以前と変わった新しいことを教えられるということが毎回のようにあります。ちょうどペトロたちが、普段見ているイエスさまのお姿ががらりと変化して見えるようになったことと、それが重なるように思われます。

礼拝におきましては、自分たちも祈るのですが、それよりもこのイエス・キリストの祈りの中

に、自分が置かれるのだというところがとても大切だと思います。キリストの祈りの言葉の中で、自分たちの見ている狭い世界から、神さまが見ている永遠へと広がっている世界を見させるために、神さまが自分たちを招いてくれているのだと受け取るのですね。ここでは、イエスさまのお姿が変わるところを、**見る**ことと神さまの声を**聞く**ことが折り重なっておりますが、その場合単に肉眼で見るといことが念頭にあるのではないと思われます。イエスさまの言葉や神さまの声を聞き、そこから深く自分に起こって来たことを考えることで、きっと見えてくるものがあるはずです。その深く心の中に沈み込んで黙想した中で神の言葉から見てみますと、それまで気がつかなかった自分の新しい姿が見えて来るといことが起こるわけです。たとえば何か大きな病気をしたり、事業で失敗をするといった大きな行き詰まる経験をしたとします。そのことを、それまでの自分の視点から見てみますと、「もう終わりだ、もう自分の人生に希望が持てない」といことになりかねないと思われます。そこでですが、聖書の中の言葉には、こういうものがあります。

生まれつき目の見えない人がいました。イエスさまの弟子たちはそれまでの自分たちの視点から、この人が目が見えなくなったのは、本人かその親の責任によるものではないかと考えました。しかし、イエスさまは「それは違うのだ」とハッキリ宣言されます。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業が、この人に現れるためである。」そう神の言葉で、宣言されたのです。この神の言葉に導かれ、教えられて、今までどれだけ多くの人々がそれまでの自分の人生の絶望から救い出されたかわかりません。大きな挫折や行き詰まりなどを経験したとしても、そこから返って新しく広がっている世界に気づかされるといことが神の言葉によって起こるのですね。モーセやエリヤとい聖書の中の人物たちも、実は大きな行き詰まりの時に、この山に登って神と出会い、新しく生まれ変わらされたのです。私自身にしましても、同じようなことが言えます。大きく世界の見方が変わったり、狭いそれまでの自分の限界を突破出来たときといのは、うまく物事が進んでいる時ではなく、大変つらい行き詰まった経験した時でした。私とい小さな問題を超えて、神さまの広い手のひらの中でこのことが起こっているのだとそのように見えるようになることで、それまで経験したことのない落ち着きを得ることになりました。

そしてその時といのは、自分を見ている目だけでなく、イエス・キリストを見る目が変わり、神さまのお姿が変わるのですね。新しい世界の広がりと共に、より深く結びつきより親しい存在として、間近におられる神さまとして見えてきます。それはどんな形で見えてくるのかといことですが、ここではイエスさまの**顔**と着ている**服**が変わったとあります。この人の顔の表情といのは、人々を寄せ付けるのか、それとも遠ざからせるのか、一番の判断材料になると思ひます。憔悴しきった顔、苦悩に満ちた顔の表情といのは、多くの場合人々を遠ざけてしまひます。重い荷物を背負って顔をしかめて歩いている人に、気軽に声をかけることは難しいでしょう。そしてこれは着ている服も同じすね。服の状態がよれよれだったり、何日も同じ服を着ていたりすると、「ああ何か大変なことがこの人に起こっているのかも」と近寄りたく思われます。そのことは自分にもわかりますので、酷い顔や服のままで、人前に出ることは出来ないと人と会うのを避けたり、家に閉じこもってしまうこともあるでしょう。

イエスさまの弟子たちが、いつも間近で見ていたイエスさまのお姿というのは、まさにこれらの苦悩する人間たちと同じ醜い姿でありました。茨の冠をかぶせられ、十字架を背負って長い坂道を登って行くイエスさまの姿を描いた絵画を見たことがある方もいらっしゃると思います。そのイエスさまのお顔は、苦渋に満ちた憔悴しきった顔であります。その顔に向かって、「他人は救ったのに、自分は救えない」と人々から嘲笑が浴びせられながら、大変惨めな死を十字架の上で迎えられました。そのイエスさまの着ていた服は、人々によってくじで分けられ、形見として残る服は 1 片もありませんでした。その酷いイエスさまの醜い姿を見て、この人が神の子なのだと、選ばれた人々の救いの担い手なのだと、いったい誰が気がつくことが出来たのでしょうか。

しかし、その醜い苦痛に歪んだイエスさまのお顔こそが、世の罪をあがなう神の子羊のお姿を、最も良く現していたのです。人々の罪の犠牲となって、苦痛に歪むそのお顔が、まことの神さまの栄光を反射させて光らせていたのです。ボロボロになって、最後は裸になってしまうそのお姿が、神さまの愛が一体どれほど深いものなのかを最ももの語っていたのであります。

そして、このみ言葉の光によって照らして見てみますと、自分たちの醜い姿も、また違った光を反射させていることがわかるのではないかと思います。自分がどうしてこのような醜い姿になったのか、そうならざるをえなかったのか、その事情をよくわかってくださる神さまのお姿が見えてきます。人と関わることで深く傷ついてしまうことがあるのですが、たとえうまく行かなかったとしても、そこに相手のことを思ったり、愛したいという気持ちがあったということは、真実だったのです。この世界を少しでも良くしようと思うのは、それはこの世界がどんなに悪いものでも世界を愛しているからですね。たとえ今は行き詰まり、気力も何も失ってしまったとしても、それは誰よりも一生懸命自分が頂いた命を生きようとしたから なのだと、キリストは良く理解してくださっています。そのように醜い人々の顔を、本当に慈しんで下さる神さまのお姿に、キリストの姿に、変容してくださるのが、今、ここだということです。つい人々が褒めてくれる顔をしなくてはとか、こんな恥ずかしい格好は人に見せられないと思ってしまうかもしれませんが、しかし「そういったことは必要ないのだよ」と、キリストは声をかけて下さるのです。イエスさまは、「私がどんな格好で、どんな顔をして自分の生涯を送ったのか、あなたたちは知っているではないか。それがわかったのなら、自分の姿を恥ずかしく思っただめだ。それは私の十字架の苦悩さえも、意味のないものにしてしまうことになるのだから。」そう言って、励ましの言葉を贈って下さいます。「誰かのために悩んだり、犠牲となって苦しんだりするその顔の方が、よっぽど私の栄光を反射させてくれているのだ。」そのように言って、イエス・キリストは喜んでくださいます。

そのような神の声を、一人でも多くの人々にかけて、ご自分の真の姿を見せたいと望んでおられるイエス・キリストは、ペトロがここで仮小屋を3つ建てましょうという申し出を断りました。それはなぜかといえば、山の上に小屋を建ててではなくて、山を降った人々が生活しているごく近いところに教会を建てることを願われたからです。そうすれば、より多くの苦痛に満ちた顔をした人々に、神さまの慈しみの光を照らすことが出来るようになります。このことを、今日の聖書の言葉から共に聞くことができればと願います。